
誰もいない教室で

グロサム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

誰もいない教室で

【Nコード】

N5265K

【作者名】

グロサム

【あらすじ】

誰もが嬉しいはずの、誰もが感動するはずの卒業式
だけど、その卒業式には一人だけ、参列できない男の子が居た。
その子はずっと教室で、皆が卒業をする、その瞬間を眺め続けてい
た・・・

「それでは、本日で終了します。皆さん、これからもがんばってください……号令」

それが、教師の最後の言葉だった。

「起立、気を付け、礼」

それが、委員長の最後の言葉だった。

そして、生徒達の生徒としての最後の行動だった。

この日、この高校は最後の卒業式をしていた。

何故最後なのかというと、今日の卒業式後、生徒は誰も居なくなるからだ。

僕は人の居なくなった、この教室に一人で佇んでいた。

その場所から見える窓の外、決して広大とは言えない僕の住んでいる町

この町は、もうじきダムに沈んでしまうのだ……。

だから、もうこの町には殆ど人は住んでいない

住んでいるとすれば、この学校の教師と、今日卒業をした生徒とその家族くらいだった。

そして、今日の卒業生が、この町に住む数少ない子供たちだった……。

僕もその一人だったけど、この卒業式には出ることが出来なかった。

それは数ヶ月前の話だった

去年の冬、僕はこの町が、生まれてからずっと育ってきた故郷がダムに沈むと聞いて、この町の周りにある山に上った。

僕はどうしても、この町を出て行く前に、この町がダムに沈んでしまいう前に、この眼に焼き付けておきたかったのだ
僕はカメラを持っていないし、絵の腕も持っていない、だけど、せめて僕のこの眼に、この記憶に刻んでおきたかったから

僕はこの町が、緑豊かなこの町が大好きだった。

ところが、その日は晴れという予報だったのに、いざ山に登ってみたら、急に雨が降ってきたのだ

しかし、その雨はパラパラという弱くて気にも留めなくていいような雨で、僕はそのまま山を登って行った・・・。

僕が町を一望できる場所まで上っていると、突然の様に雨が強くなり、視界は一気に悪くなってしまった

なのに、僕はどうしても諦めきれずに、その視界が悪い中でも一歩一歩と前へ進んでいった

町を見下ろそうとしていたのに……僕はそのまま、普段なら柵があるはずの場所で、山の下へ足を滑らせて落ちてしまったのだ

気が付いたとき、僕は既に身体から抜けていた……そこは山の下にある林の中で

僕はそこに横たわり動かない自分の身体を見ていた、不思議と驚きも悲しみも湧かないで

『ああ……僕は死んだんだ……』

と、その時はすんなりと受け入れることが出来てしまっていた
だけど同時に僕は聞いた事がある、死んだ事を受け入れた者は現世に留まらずあの世へ逝くと

なのに僕はここに居て、ずっとこの場所を離れなかった……どうしてなのかは解らなかった

その日の夜、捜索が出されたらしい僕の身柄を見つけた人が、僕の

身体を病院へ連れて行くが

僕はそこについていく事もなく、ただフラフラと家に向っていた。

家には誰も居なかった、多分、皆病院に行っているんだと思う

その数日後に僕の葬式が開かれて、学校のクラスメイトや教師、クラスメイトの家族など

町に残っている人たちが来てくれたけど、僕は知っていた……この人たちが皆、世間体を気にしてここに来ていることを

その日の夜、僕の両親だけとなった居間で、父親が言った

「あの馬鹿、何の役にも立たねえクセに、最後に役立ちやがったな」
って

同じところで、僕の母親が言った

「それでも、ほんの少しの額だけどね」って

僕の両親はどちらもろくに働かないで、毎日遊んでばかりだった。

だから、家のお金は僕の兄が高校の後に大学にも進ませてもらえず両親の都合で就職に就かされて、そのお金を家に納めているのだ
そして、僕が死んだ事で、両親は1つだけ喜んだ

僕の家は決して裕福ではないけども、僕が死んだ事で手に入る保険金
が

僕の両親にとっては僕よりも大切なモノなのだった……。

僕は両親が僕の事を必要としていないことは知っていたし
学校でも、正直に言えば虐められていた……。

僕の葬式の時も、その後に皆口々に

『アイツは馬鹿だ、こんな時期に死ぬなんて、こっちの進学とかに
影響でたらどうしてくれるんだ』

って、皆が僕の死を、僕自身のことを呪い続けていた。

それは教師もだった……。

僕の死を唯一本当に悲しんでくれたのは兄だった、僕は兄には悪いことをしてしまったと思った。

生前も、兄は僕に優しくしてくれていたし、何度も僕を助けてくれていた。

僕はその恩を返すことも出来ないで、死んでしまったのだ。

そして、僕がこの世に留まっている理由を、僕は直に気がついた。

それは皆が僕の死を呪ったという事だ、クラスメイトが教師が、僕の死をよく思わないで

それでも、自分たちの将来に影響が起こらないかという自分自身のためだけで

僕の事を心配も同情もしてくる人なんていなかった。

だから僕はこの場所に……この教室に居るのだ。

あの葬式の後、僕は直に吸い寄せられるように教室に来て

気が付けばそこから出てこれず、ずっとここに居るのだ、今日の卒業式になるまでずっと

きっとこの後もずっと……ダムに沈んでしまっても僕はここに居るだろう。

だけど、僕は其れを悲しいとは思わない、兄には悪いとは思っけど

僕はこの町が好きだから、僕はこの場所が好きだから

だから僕はここに居る、ずっとずっとここに居る

この町に誰も居なくなっても、この町がダムに沈んでも僕はずっとここに居るのだ

いつか勝手に消えてしまっまで……。

この、誰もいない教室で……。

(後書き)

初めまして、今回、初めて投稿させていただきました、グロサムと申します

初めての投稿ということで、至らない点や、まだまだ駄目な点など沢山あると思いますが

お読みくださった読者の皆様、どうか、感想やアドバイスなどをいただけますと大変ありがたい限りでございます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5265k/>

誰もいない教室で

2010年12月14日17時25分発行